
此岸の花

白田マコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

此岸の花

【Nコード】

N3910K

【作者名】

白田マコ

【あらすじ】

黄昏時と、川と

そして赤い華が嫌いだということです。

彼岸花をモチーフにした時代物ホラー、『彼岸の華』の続編。

（前書き）

こちらは彼岸花をモチーフにしたホラー、『彼岸の華』の続編となります。

黄昏時と、川と
そして赤い華が嫌いだということです。

此岸しがんの花

ええ、ええ。

どうということもない村の、どうということもない娘でございましたよ。

細っこい身体にすぐ切れてしまうような髪 of 娘でね。

そうそう、名はちやと申しましたか。

……ちやは、不運な娘でございました。

どうということもない村で、それでも病にかかることもなく年頃まで育ち、そして優しい良人を見つけた。そこまでは、そう、そこまではよかったのでございます。

ただ、祝言をあげて一年と少しも経ったときでしょうか。その良人——弥七と申しました——が、突然行方知れずになってしまったのでございます。

弥七は薬売りでございました。月に一度、様々な薬の入った薬籠を背負って、街へ下りるのです。——街へ逃げたのではないか？ いえいえ、穏やかな村の生活に、弥七は何の不満も抱いているようには見えませんでした。何より、弥七は幼いころから共に育った妻、

ちやを心から大切にしておりました。私は村の年寄りの一人として、その男を良く知っています。そう、弥七はちやを置いて、一人街などに逃げるような性根の男ではなかったのです。

では、弥七は何処へ消えてしまったのか？

：なにもない村とはいえ、それでも野盜野獸の類は尽きぬものです。おそらく、町へ降りる途中で、それらの性質の悪い奴原に襲われてしまったのでしょう。それが、私どもの大半が出した結論でございました。

そして、それは事実であつたのです。

：———弥七がいなくなったのは、炎天をいただく鮮緑の夏。

そして弥七が帰ってきたのは、彼岸花の咲き乱れる朱紅の秋でございました。

ある日、ふらりといなくなったちやは、日も沈んだ頃、とぼとぼと彼を抱えて帰ってきました。

細い娘にも抱えられるようになってしまったそれ。それは、丁寧に泥を払われた骨。そして血の染みた着物と葉籠。

：弥七は、骸むくろとなって帰ってきたのです。

それからのちやの嘆きようは、それはそれは痛ましいものでございました。年若い娘が細い肩を震わせて泣く様は、見ているこちらにしても胸を裂かれるような心持でした。

それでも、少しすると、ちやは少し元気を取り戻したのでございますよ。

なぜなら、彼女の腹には弥七の忘れ形見が宿っていたのですから。

しかし、天のなんと残酷なことか———唯一の女の心の支えも、

産み月に達する前に腹から流れてしまいました。

……

それ以来、です。ちやの家の周りに、彼岸花が咲き乱れるようになったのは。

ちやは、弥七を持ち帰って以来、うわ言のようにこう呟き続けておりました。

『黄昏、川、赤い華。ぜんぶ、ぜんぶ、大嫌い。』
と。

しかし異な事かな。その彼岸花、どうやらわざわざちやが、自分の手で植えたもののようなのです。

良人と子を亡くした哀れな娘。それでも、その娘のことをずうっと気にかけていられるほど、私たちにも余裕はありません。ちやを氣遣いながら、それでも私たちが各々の生活に忙殺されているうちに、弥七がいなくなって幾度目かの秋が巡ってまいりました。そして、あの赤子は現れたのです。



初め、誰もそれを信じようとはしませんでした。いや、薄気味悪がって、近づこうとしなかったのです。

『ちやの家から、赤子の泣き声がする』

狭い狭い村の中。単なる噂ともいえません。なにせ、村の者のほと

んどが、実際にその声を聞いていたのですから。
そして村で集まりを開いた結果、比較的ちやや弥七と親しかった私がそれを確かめに行くことになったのです。

変わらず巡りくる秋の、ある一日。
せきばく寂寞とした風。赤い彼岸花。そして、頃はちょうど——黄昏時でございました。

「ちや。」

薄い戸を開けて、私はなんでもない風をよそおってその人影に声をかけました。

「少し、味噌を貸してもらいたいのだが——おや？どうしたのだい、その赤子は？」

戸を開いた途端、異様な雰囲気、舌が乾いて口蓋に張り付きそうになるのを必死で抑えて、私はその問いを口にしました。

そう、ちやは、赤子を抱いていたのです。ぐずりもせず、ちやの胸元に大人しく収まっている赤子。しかし、腹の膨れたちやを見た者はなく、最近子を生んだ娘も無く。

『おとぎち音吉。男だったら音吉、女だったらさよ。そう、決めていたの。』

そう、嬉しげに笑ったちやは、私の知る頼りなげな娘となんら変わ
りないはずでした。

しかし、しかし。私の全身を刺す違和感は消えませんでした。窓か
ら差し込む赤い光が、さらにそれに拍車をかけました。

「どこから、もらってきた。」

ごくり、と大げさに喉を嚥下させて、私はそれだけの台詞を搾り出
しました。一方、ちやはというと、どこまでも穏やかな声で

『もらう…？違う。この子は、わたしの子。』

わたしの坊や。取り返してきたの。彼岸花の下から。』

ちやが軽く、その柔らかかそうな背を叩くと、赤子は眠そうなぐずり声をあげました。

「彼岸花……？」

その言葉から、私はちやがどこかの捨て子を拾ってきたのだと思いました。いや、そうならいいと思いました。しかし、そんな果敢ない望みを断ち切るように、幾分干からびた娘の唇は、さらに奇怪な言葉を吐き出します。

『剃刀花を、灯籠花を、捨て子花を、死人花を————
彼岸花を摘み取って、こちらの世に奪い取ったの。』

弥七は取り戻せなかったけれど、この子は、取り戻せた……私の坊や。

この子はもう彼岸花じゃない。彼岸などに返すものか。
わたしの愛しい、此岸^{しがん}の華……』

くすくすと笑うちやは、本当に幸せそうでありました。
しかし、幸せそうに笑う娘の傍で、私は気づいてしまったのです。
違和の正体に。

赤い光に照らされ、濃い影をおとすちや。
しかし、その赤子は、かすかな影すらもたぬことを——……



私の話せることは、もうありますまい。

その赤子、ですか？

：おりますよ、ちやと共に。一面彼岸花に囲まれた其処には、もはや誰も近づきませぬが。

——：ちやは、一体何をしてしまったのでしようねえ。

赤子は、一体何者なのでしようねえ：

わかりませぬ。禍々しいとは、感じませなんだ。それでも、あの影のない赤子は、黄昏の光と相まって、いまだに不吉の一つとして私の心に影を落としているのでございます。

……

おや？

おやおや？

わからないといえ、もう一つ。

あなたは、果たして何方いづかたのお方でございましょうかな？
いえ、私のこの両の目には：

あなたも、影を持たぬように映るのですが。

了

(後書き)

種田山頭火が好きすぎてどうしようもない。

影のない誰かは何のためにちや達の話を読んでいたのか。

“音吉”を連れ戻すのか、ちやにつけこむのか、はたまた元より意味など無いのか。

そもそも影のない誰かは一体何者なのか。

解釈はご自由に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3910k/>

此岸の花

2010年10月21日21時19分発行